
流れ星

小夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流れ星

【著者名】

ZZマーク

255531

【作者名】

小夜

【あらすじ】

娘を深く愛するが故の、余りにも悲しい物語。

(前書き)

短いのでサクッと読みます。感動物が書きたくて挑戦してみました。
拙い文章ですが、楽しんでいただければ嬉しいです。

「流れ星が見たい」

簡素な診療所で横たわる円香は、そっと呟いた。

昔から虚弱体質で外出も出来ず好きなものを食べられなくとも文句ひとつ言わなかつた我が子が、こんなことを言つのは珍しい。

「どうして？」

そつと畠を覗くと、憂いを帯びた畠がじけりを見つめた。吸い込まれそうになる。

「看護婦さんに聞いたの。流れ星に御願いをすれば叶うつて「…そう、どんな御願いをしたいの？」何かが欲しいのなら、生計はかつかつではあつたが極力買ってやるうと思った。
この難病では、円香の老い先が短いのは誰もが分かつていた。

「秘密よ。ねえお母さん御願い、流れ星が見えるところに連れて行って欲しいの」

「とは言つてもねえ。外出許可は出でないし…そういう見れるものでもないし…」

「御願い、御願い」

いじらしいほどにシャツの袖を掴み、啜り泣いている姿に耐え兼ねて思わず口走つた。

「わかったわ。内緒で今晚そここの丘に行きましょ。お医者様には秘密ね

あどけない表情で我が子は何度も頷く。なんとも愛らしく、微笑ましかつた。

そして同時に、こんな当たり前のことでしか娘に幸せを『』えてやれない自分に対する嫌悪感が沸いた。

夜に円香を連れ出した。澄み切った空気が辺りを包み込んでおり、秋の虫が忙しく鳴いている。草の青い香りが立ち込め、噎せてしまいそうだ。

「あ、流れ星」

眩ぐと、円香は慌てて空を見て目を閉じると手を合わせぶつぶつと何かを囁く。その仕草がなんとも愛らしく、思わず抱き締めた。

「お母さん、願い事は何かって聞いたよね」

「…ええ、聞いたわよ」

「お母さんが早く私を忘れて、幸せに生きられちゃつてお願いしたの」
「どうこう」と…
「ねえお母さん、お母さんはもう分かってるはず。私はもうこの世にいなって」

涙で視界が滲むのを感じたが、円香を抱き締める手は緩めなかつた。

「いい加減目を覚まさなきや、いつまでも私に縛られてちゃいけないよ。そんなのとても悲しい」

「な…何を言っているの?円香ならいいいるじゃない…」「いない。私はいないの。お母さん、私はそろそろ行かなきやいけない所があるから、もう会えないの」

「嫌、嫌よ行かないで…私円香がいないと生きていけない…」

「ごめんなさい。生んでくれてありがとう、お母さんの子どもになって嬉しかったよ。幸せになつてください」

いつの間にか手の中の小さな温もりは消えて、いつまでも丘の草原に膝を付き咽び泣いた。

(後書き)

初投稿作品、如何だったでしょうか。些細な事でも構いませんので感想等いただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5553i/>

流れ星

2010年10月28日07時12分発行